

## シャンカラ派におけるヴェーダ聖典とその伝承

インド社会では、19世紀にイギリスの統治のもと、近代学校制度が導入されるまでは、「パータシャーラー（学校）」と呼ばれるヒンドゥー教の伝統的教育の場があった。しかし、西洋的教育の普及に伴い、伝統的教育は衰退の道を辿ったが、現在もなお、シャンカラ派などのパータシャーラーでは、伝統的な教育がおこなわれ、「語られる聖典」としてのヴェーダ聖典が伝承されている。今回は、ヴェーダ聖典の中でも、特にウパニシャッド聖典の解釈学として展開したヴェーダ哲学をめぐって、シャンカラ派の伝統的教育の一端に注目し、ヴェーダ聖典の口頭伝承の特徴を論じてみたい。

### シュリンゲリ僧院の伝統的教育

インド最大の哲学者と言われるシャンカラ（約700～750）の不二一元論哲学は、今日でもインド知識人に大きな影響力を及ぼしている。シャンカラはシャンカラ派の総本山、シュリンゲリ僧院を開創したと信じられている。シャンカラ派は中世以後、インド思想界に圧倒的な勢力を保持してきた。カルナータカ州の山奥に創設されたシュリンゲリ僧院は、わが国では、空海が都から遙か離れて、真言密教の根本道場を設けた高野山を想起させる。空海の思想がシャンカラのそれと類似していることは、比較宗教学的に興味深い。

シャンカラ派の伝統では、ウパニシャッド聖典は本質的に「ブラフマンとアートマンの一体性（梵我一如）」の真理を教示すると説く。シャンカラ派僧院では、ヴェーダ聖典の伝統的教育がおこなわれ、学生期にある約70名の子どもたちがヴェーダ聖典を学習している。ヒンドゥー教では、伝統的に四住期（āśrama アーシュラマ）と呼ばれる4つの生活期、すなわち学生期、家住期、林住期、遊行期が設けられてきた。そのライフ・モデルによれば、人生は全体としてブラフマン（梵）の探求に向けられ、師の家に住み込んで、ヴェーダ聖典の学習に励む時期（学生期）に始まり、ヴェーダ聖典の学習を終えて、生家へ帰り、結婚して家庭生活を送る時期（家住期）、さらに家業を引退して森で暮らす時期（林住期）を経て、出家遊行して解脱を求める時期（遊行期）という4つの生活期からなる。古代インドにおいて、この四住期がどの程度までおこなわれていたのかは明らかでないが、現在でも、多くの人々がこうした生き方を理想としている。

### 「聴聞・思惟・瞑想」の階梯

シャンカラ派の伝統では、ヴェーダ聖典の学習について、「聴聞」（śravaṇa）、「思惟」（manana）、「瞑想」（nididhyāsana）の三階梯を継承してきた。「聴聞」とは、弟子が師からヴェーダ聖典、特にウパニシャッド聖典および師の言葉を聞くことであり、「思惟」は師から聴聞した内容について、弟子が自らの思索を深めることである。さらに「瞑想」とは、師との討論によって到達した聖典の要点を、弟子が繰り返し反復することを意味する。弟子は心の深みを開き、ブラフマンの知識を獲得して、究極的に解脱に到達することを目指す。シャンカラ派では、この三階梯の中でも、聖典の「聴聞」が重視される。<sup>(1)</sup>

「聴聞・思惟・瞑想」の階梯は、古ウパニシャッドの時代にすでに確立されていたわけではない。それはヴェーダ哲学者たちが後にウパニシャッド聖典の中に、この三階梯を読み込んで解釈したものである。古ウパニシャッド聖典には、たとえば、学生期の少年がヴェーダ聖典を学習する話が、父子の対話の中に記されている。それは『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』第六章における哲人ウッダーラカとその息子シヴェータケートウとの対話である。<sup>(2)</sup> 息子のシヴェータケートウは、12歳になったとき、師

に弟子入りし、24歳で全てのヴェーダを学習し終える。そのことから、つい傲慢になり、自分では聖典に精通したと自惚れて、意気揚々として家に帰ってくる。このことは、師のもとでヴェーダ聖典を学習して、学生期を終えたことを示唆している。息子のシヴェータケートウは師からヴェーダ聖典の言葉を学んで、聖典を暗唱し終えているが、父親ウッダーラカの目からみれば、息子はいまだヴェーダ聖典をよく理解してはいない。

そこでウッダーラカは、息子に次のように尋ねる、「それによって、いまだ聞かれなかったことも聞かれたことになり、いまだ考えられなかったことも考えられたことになり、いまだ認識されなかったこともすでに認識されたことになるような、あの教え（ādeśa）を〔先生に〕尋ねたのか」。息子は答える、「いったいその教えとはどのようなものですか」。父親のウッダーラカは、その教えとは「有」（sat）の一元論、すなわち万有がそのまま絶対者ブラフマン（＝アートマン）であることについて詳説する。ウッダーラカは「この微細なものの一切はそれを本性としている。それは真実である。それはアートマンである。シヴェータケートウよ、汝はそれなり」と説く。父親のウッダーラカは息子との対話の中で、この同じ言葉を9回繰り返す。この同じ言葉の中で語られる「汝はそれなり」（tat tvam asi）は、シャンカラ派伝統では、「われはブラフマンなり」（aham brahmāsmi）とともに、ウパニシャッド思想を端的に教示する神秘的文章（mahāvākya「大文章」）として知られる。「汝はそれなり」とはシャンカラの注解によれば、「ブラフマンがアートマンに他ならないということ」（brahmātmbhāva）、すなわち「ブラフマンとアートマンの一体性（梵我一如）」を教示するものである。<sup>(3)</sup>

ちなみに、ヴェーダ聖典の「聴聞・思惟・瞑想」という三階梯の典拠は、伝統的に『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』に見いだされる。

ああ、実にアートマンこそ、見られるべきもの、聞かれるべきもの、思惟されるべきもの、瞑想されるべきものである。マイトレーイーよ。ああ、まことに、アートマンが見られ、聞かれ、思惟され、瞑想されたとき、この世界のすべてが知られるのである。<sup>(4)</sup>

このウパニシャッド聖典の文章は、後代のヴェーダ哲学派の哲学者たちによって、「アートマンこそ、見られるべきものである。すなわち、聞かれるべきもの、思惟されるべきもの、瞑想されるべきものである。」として解釈された。この聖典解釈にもとづき、「聴聞・思惟・瞑想」の三階梯が確立されたのだ。シャンカラは「聴聞・思惟・瞑想」の階梯を達成することで、ブラフマンが直観されると言う。シャンカラ派の伝統において、ヴェーダ聖典、特にウパニシャッド聖典が師から弟子へ、父から子へと世代を超えて口頭伝承されてきた背景には、シャンカラ派の開祖と言われるシャンカラへの人びとの信仰があった。

### [注]

- (1) 詳しくは、拙稿「シャンカラ派における聖典の言葉と修行階梯」『印度学仏教学研究』第67巻第2号、日本印度学仏教学会、2019年、272～279頁を参照。
- (2) *Chāndogyaopaniṣad*, in *Ten Principal Upanishads with Śāṅkarabhāṣya*, edited by Śrī Govinda Śāstrī Tipṇi, (Works of Śāṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978), VI.i.1-VI.xvi.3, pp. 503-540.
- (3) Śāṅkara, *Brahmasūtrabhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1980), I.i.4, p. 64.
- (4) *Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, in *Ten Principal Upanishads with Śāṅkarabhāṣya*, IV. 5. 6, p. 941. Cf. *Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, II.4. 5, p. 760.